

公平で持続可能な暮らしの実現に向けて

生活時間からのアプローチ



家庭選修 教授 佐藤 裕紀子

Who?!

家事を行っているのは誰か？

日本では生活時間のジェンダー格差が大きい国です（図1）。男性も家事や育児に参加するようになってきたといわれますが、これは時代の流れといえるでしょうか。

男性の家事労働時間の平均値を変化させている要因を、時代効果（時勢を反映）、年齢効果（加齢・ライフステージ）、ジェンダー効果（性別）の3つに分けて解析してみました。その結果、平日の男性の家事労働時間に影響しているのは、時代やコホート効果よりも、年齢や男性全体の平均値を押し上げる男性全体の定年退職者との多さ（60歳以上の層）であることが確認されました（図2）。

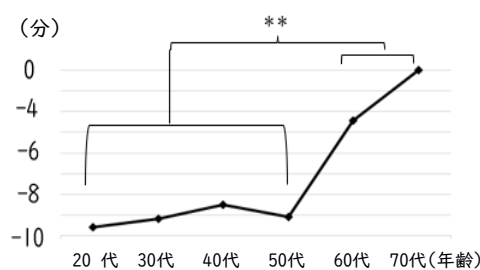
これを踏まれば、男性全体の家事労働時間の増加は時代の影響というよりも高齢化がワーク・ライフ・バランスを見直す必要から時間の使い方を見

Awards

時間の視点から近代日本の家族・国家・教育の関係について論じました。

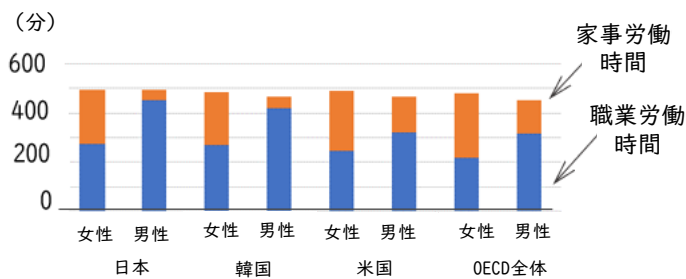
■2020年度 日本家庭科教育学会賞

■2021年度 茨城大学学長学術表彰優秀賞



※多重比較 (Tukey-Kramer)。
分は70代を基準に他のカテゴリとの時間の長さの違いを示す。

図2 男性の家事労働時間の年齢効果



※データ) OECD "Balancing paid work, unpaid work and leisure" 2020.
出典) 『男女共同参画白書 令和2年版』より佐藤作成。

図1 生活時間の国際比較（週全体平均、1日当たり）

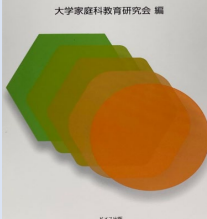
Perspective of Time 時間という視点

時間は誰もが平等にもつ生活資源です。時間の視点から生活を把握すれば市場で取引されない家事等の活動も含め生活を総合的に評価することができます。

持続可能な社会と人の暮らし



ウェルビーイング実現の主体を育む 家庭科教育の理論



■日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分科会の委員で執筆しました。持続可能な生活を実現する上での課題や対応について述べています。私は「第8章 生活時間」を執筆しました。(2024年, 建帛社)

■ウェルビーイング実現の主体を育む家庭科教育の可能性や課題、意義などについて述べています。私は「第4章 ジェンダー平等と家庭科教育」を執筆しました。(2024年, ドメス出版)

Time Poverty 時間貧困

1日が24時間であることは誰にとっても平等です。しかし、実際は仕事をもちながら子育てをするひとり親家庭の母親、家族のための家事やケア労働を行うヤングケアラーの若者等、健康的な生活を送ったり、将来を見据えた活動に従事したりする時間が確保できない人も少なくありません。生活する上で最低限必要とする時間を確保できない状況を意味する概念に時間貧困があります。途上国の女性たちの貧困状態を説明するものとしても利用されています。現在は公平な社会の実現に向けて、時間貧困をめぐる問題の解決に向けた実証研究に取り組んでいます。

*科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

「ヤングケアラーの時間貧困とそれに起因するセルフネグレクトに関する研究」(23K01959)

研究代表者 佐藤裕紀子